

地域・離島歯科医療実習 レポート

学籍番号：4314100353

氏名： 疋田宗一郎

実習先： 口之島

実習期間：令和 1 年 6 月 7 日 ~ 6 月 9 日

1. 自然環境

トカラ列島に所属する火山島であり、トカラ列島の最も北に位置しており、十島村の玄関口にあたる。面積は 13.33 平方キロメートル。人口は 128 人。最高峰は前岳で標高は 628 メートル。安山岩質溶岩ドームの集合した火山島で島の中央部に前岳があり、前岳南島斜面には急な滑落崖が存在する。

口之島は自然が多いが、その中でもタモトユリは口之島の固有種で、園芸品種のカサブランカなどがこのタモトユリから作られている。乱獲されたことで一旦は野生のタモトユリは全滅したが、現在は島民らの努力で植え戻しが行われている。

口之島の野生化牛は野生状態で生息する固有種の在来牛である。起源は少なくとも約 100 年前とされている。1918 年から 1919 年頃に諏訪之瀬島から移入された数頭の子孫である。

口之島を含むトカラ列島は温帯気候区と亜熱帯気候区の間であり、両気候区が入り交じった気候となる。

口之島集落の中心にはコウと呼ばれるわき水が出る場所がある。集落から 9 キロ離れた場所にはセラソマ温泉という温泉がある。

また旧暦 11 月には、島内のお宮に新米で作った酒やサトイモを供え、家族の健康と豊作を祈る、霜月祭りという祭りがある。

2. 社会的背景

平成 12 年の国勢調査によると 0~14 歳は 13.3%、15~64 歳は 42.8%、65 歳以上は 43.9%であった。第一次産業に従事する人の割合は 26.1%、第二次産業に従事する人の割合は 29.3%、第三次産業に従事する人の割合は 43.5%である。主な産業は本土に出荷する黒毛和牛を生産する畜産業と、トビウオ、カツオ、サワラなどの漁業が中心である。

口之島という地名は江戸期より見え、薩摩国川辺郡のうに属していた。薩摩藩直轄地で郷には属さず、薩摩藩の船奉行の支配下に置かれていた。中之島や宝島と同様に津口番所、異国船番所、異国船遠見番所が併置されており、鹿児島城下より派遣された在番と横目が常駐しその他郡司、島民から推挙された 2 名が島政を行った。「薩藩政要録」及び「要用集」によると、所惣高 110 石余とある。第二次世界大戦の後、昭和 27 年（1952 年）まで、口之島の北にかかる北緯 30 度以南は、アメリカに占領下にされており、口之島は、占領下の間、本土と奄美や沖縄の島々との密貿易の島として栄え、一時は、繁華街もできるなどした。その後、日本に復帰したが、漁業が中心の島では、経済的にも自立することは難しく、子どもたちも高校に進学するには鹿児島島の本土に行くしかなく、次第に人口が減少している。

3. 住民の生活

住人の生活については、村の人とあまり話す機会がなかったが、上記しているような産業に就いているようである。本土への船も頻繁に来るわけでもない。鹿児島市内にマンションを買って滞在時にそこ

に滞在する人もいるようである。島内で生産されない生活物資は船からの輸送によるので、その分の輸送代が商品代に上乗せされるので、鹿児島市内よりも多少値段が高い。

山海留学生といって、全国から小学生・中学生を受け入れている。

4. 医療供給体制

平成 12 年度国勢調査によると、十島村の各島には診療所が一つあるだけで常勤の医師、歯科医師はいない。看護師が島内に一人いるだけである。緊急時にはまず看護師が対応に当たり、島外の担当医師に状況を連絡し、現地対応が困難な場合には鹿児島市立病院ドクターヘリ、県防災ヘリ。鹿屋自衛隊ヘリで市内の病院まで搬送するようである。外傷が約 4 割を占める。

実習概要

日付	内容
6/7	23 時発のフェリーで口之島へ。
6/8	5 時に到着。8 時から診療開始。20 人弱の小学生・中学生、および低年齢児の検診を行う。義歯の調整、う蝕治療が各 2 件ずつ。
6/9	患者が来なかったため 9 時に診療終了。13 時半のフェリーで鹿児島市内へ戻る。18 時前に到着。

振り返り記録

十分な医療を提供できない中で、限られた機材や人員を駆使してへき地に住む方々への診療を行うということはとても難しいことなのだと実感した。ないものはないもので割り切れれば楽しくすごせるのだとも思った。

一方で、緊急時にドクターヘリなどを呼ぼうにも天気が悪ければ、すぐに向かうことはできない。場所によって命の助かりやすさ、助かりにくさがあるということを感じた。なるべく病気にならないようにするため、日々の生活習慣への啓発活動などを行うことでリスクを減らせるはずなので、このような面にも注力を県が行うべきだと思ったし、せっかく巡回診療で歯科医師が来るのだから、歯ブラシの使い方など、歯科医師にできることももっと行うべきだと考えた。